

Toyo University



News

第18号

CONTENTS

～学長・センター長メッセージ～

目次	p.1
第3期認証評価を見据えた教育改善に向けて	p.1
他校のグッドプラクティスに学ぶ	p.1

～全学FD研修会・活動報告～

英語で授業を行うためのFD研修会	p.2-3
FDワークショップ	p.3
新任教員FD研修会	p.4-5
一般教員FD研修会	p.5
FD活動状況報告会	p.6
TA（ティーチング・アシスタント）FD研修会	p.7

～FD活動紹介～

大学院担当教員（海外大学での博士号取得者）へのインタビュー	p.8-11
学生FDチーム活動報告	p.11
他大学との交流	p.12

～FD推進支援室からのお知らせ～

FD推進センター活動報告	p.12
FD推進センター組織図	p.12

第3期認証評価を見据えた教育改善に向けて

学長 竹村 牧男

日本の大学に受審が義務付けられている、いわゆる認証評価は、現在、第2サイクルの終盤にさしかかり、平成30年度からは第3期に入ります。本学が受審している大学基準協会は、第3期の認証評価においても、第2期の主要なテーマであった「内部質保証」を、引き続き認証評価において最も重視するポイントとして、これを有効に機能させることの重要性を訴えています。

FD活動の主たる目的は「授業改善」にあると思いますが、このことにおける内部質保証は、どのように考えるべきでしょうか。授業は、建学の理念、人材養成の目的・教育目標に基づき、3つのポリシーを確定し、そのカリキュラムポリシーに基づいて具体的なカリキュラムが構成され、その意図を受けてシラバスが作成されて、その下に授業が行われなければなりません。その各レベルでの絶えざる点検・評価が大事であり、本学では各学科・専攻において、その組織的な検討が行われていることが一つの質保証になります。

さらに、授業のアンケート等により、授業のあり方そのものの点検・評価を行い、改善すべきは改善していくことが必要であり、そのことへの支援活動としてFD活動があるといえます。そのように、単独でFD活動が重要なのではなく、教育活動の自己点検・評価活動による内部質保証システムの構築とその実践こそが重要であることを認識すべきでしょう。

上記の第3期の評価項目のもう一つの特徴は、学生の学習成果の把握と評価が求められたことです。このことについては、学位授与方針に示した知識、技能、態度等の学習成果を学生が修得したかどうかを把握し、評価することが必要であり、そのために、学習成果をさまざまな観点から把握し評価する方法や指標を開発し、それらを適用することが必要である。大学は、こうした学習成果を把握し、評価した結果を、教育内容、教育方法等の改善に適切に活用することが必要である、とされています。

この、「学習成果を把握し評価する方法や指標を開発」することは、学問分野に応じてなされるべきであり、したがって学科・専攻単位で真剣に取り組まなければならないことです。このことも、FD活動の一環として、きわめて重要な課題です。

こうした背景のもと、本学のFD活動のいっそうの充実と、第3期認証評価への対応として、学習成果の評価指標開発に、今から学科ごとに組織的に取り組んでいただけますよう、要請したいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。



他校のグッドプラクティスに学ぶ

FD推進センター長 北脇 秀敏

平成28年3月に神田副学長からFD推進センター長を引き継ぎました。最近では他校とFD活動に関する様々な意見交換を行い、グッドプラクティスを勉強させてもらっています。他大学では、FD活動を行う部署が、学修支援や教学IRデータ分析機能を併せ持っているなど、大学によりさまざまな形態を取っています。また教員向けのサポートとして、授業設計と成績評価ガイドラインをWebで公開したり、学習成果の可視化のためのルーブリックを教員が手軽に作成できるマニュアルを用意している大学や、ICTを活用してポートフォリオ等から学生のきめ細かい指導につなげている大学もあります。本学でもICTの

活用で得られたビッグデータを教学IRで適切に分析し、FDに活かすという「ICT-IR-FDサイクル」をうまく回せるなら、FDの効果も飛躍的に上がると考えます。他校のグッドプラクティスを参考にし、本学のあるべき姿を模索してゆきたいと思っています。



英語で授業を行うためのFD研修会

参加者の声（白山キャンパス実施報告）

安藤 和宏（法学部法律学科）

2016年3月16日、「英語で授業を行うためのFD研修会」に参加しました。今年度から知的財産法を英語で教えることになり、そろそろ準備をしなければと思っていた矢先に、タイミングよく研修会の案内が来ましたので、迷わず申し込みました。アメリカで3年間の留学経験があり、また少しですが通訳経験もあるため、英語を話すことに不安はありませんでしたが、果たして本学の学生が英語による法律の講義を理解してくれるのかという心配は尽きませんでした。

当日は、朝から夕方までの長丁場で少々疲れましたが、なかなか興味深い研修内容でした。特に学生の理解を助ける効果的なビジュアル、声、ボディランゲージの使い方を学ぶことができたのは収穫でした。学生の目線で授業を行うこと、これは日本語も英語も同じです。しかし、言うは易く行うは難しです。研修会の最後に参加者が一人につき5分程度の模擬授業を行う

のですが、英語で授業を行うことの難しさだけでなく、楽しさも同時に感じることができました。やはり、教員が楽しく授業を行うことが学生にとって一番の理解の手助けになります。

また、他学部の先生方と研修を通じて、知り合いになれたのも思わぬ収穫でした。ランチブレイクには、4人で大学正門前のカレー・レストラン「RAJ」に行きました。そろそろその時ご一緒した先生方と、春学期の英語の授業の感想会を開きたいと思っている今日この頃です。



英語による模擬授業を行う様子

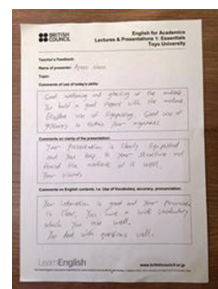
仲 綾子（ライフデザイン学部人間環境デザイン学科）

平成28年3月16日に白山キャンパスで開催された「英語で授業を行うためのFD研修会」に参加した。研修会は自己紹介からはじまり、講義の構成、質問への対応、講義ノートを作成方法等について、参加者がペアや4人1組となり、各組で議論した上で、全体に共有するという方法で進められた。研修会の最後には全員が自由なテーマでプレゼンを行った。

参加者の多くは、すでに英語で授業を行った経験のある方が多いようで、留学経験もない私は気後れし、参加したことを一瞬後悔したが、現在、自身で高い料金を支払って、英語のプライベートレッスンを受けていることもあり、貴重な機会を無料で提供していただいているのだから有意義な時間にしようと気持ちを切り替えて臨んだ。

最後のプレゼンでは、私の専門である建築のデザインについて

てたどどしく語ったが、参加者のうちお二方から後日「先生のご専門に関してご相談がある」との連絡を受け、ご縁が続いている。改めて英語は伝える手段で、大切なのは中身だという思いを強くした。しかし、伝える手段は的確に使いこなすことが求められる。本研修会で得たスキルをもとに今後も継続的に英語を学んでいきたい。その動機付けのひとつとして、研修会講師から頂いたコメントが大きく貢献している。改めて貴重な機会をいただいたことに感謝したい。さらに、本研修会の方が人の縁を結んでくださったことにも心からお礼を申し上げたい。ありがとうございました。



講師からのフィードバックシート

参加者の声（川越キャンパス実施報告）

政春 尋志（理工学部都市環境デザイン学科）

平成28年2月3日、川越キャンパスで開催された「英語で授業を行うためのFD研修会」に参加した。講師はブリティッシュカウンシルのRob Watson先生である。研修テキストをもとに、話の組み立て方から始まり、内容の転換に際して使われる英語表現や、質問への対処のための場面別の表現、声の抑揚に至るまで、充実した内容だった。講師の説明は明確で、また参加者と対話的に進められたので非常にわかりやすかった。講義やプレゼンの組み立てなど、普段ある程度は意識してはいても日本語でも改めて体系的に学ぶ機会が少ない内容を学ぶことが出来、新鮮に感じた。

後半は、参加者によるプレゼンだった。実は研修の中でプレゼンをする予想しておらず多少慌てたのだが、午前中の研修で学んだことを活かして話を組み立てようと努めた。講師から

いただいたコメントでは、一応理解いただけたようでほっとした。また、細部にわたって的確な指摘もいただいた。他の参加者のプレゼンはそれぞれ興味深いものだった。

参加された同じキャンパスの先生方とも知り合う機会になり、研修を受けてよかったと思う。その後まだ実践の機会はないが、英語での講義・発表の際には、この研修を復習して、よりよい発表につなげたいと考えている。

最後になりましたが、講師のWatson先生を始め、この研修の機会を与えてくださった関係各位に感謝いたします。



参加者の声（朝霞キャンパス実施報告）

池田 千登勢（ライフデザイン学部人間環境デザイン学科）

平成28年8月4日（木）、朝霞キャンパスで開催された「英語で授業を行うためのFD研修会」に参加しました。プリティッシュカウンシルネイティブ講師のMr. Peter Breretonによる研修会はとてもわかりやすく、すぐにでも使える、具体的なコンテンツが満載の楽しいレッスンです。朝から終始楽しい雰囲気英語のプレゼンテーションの基本を学ぶことができたと思います。

国際会議などで初対面の方にお会いした時の挨拶と自己紹介の仕方からスタートし、全体構成(Structure & Organization)、相手を惹きつける導入部(Hook)、次のトピックに移る時の目印 (Signpost) などを学びました。これらは全て、説明→参加者同士で考える→実践的なワークショップで話してみる、というアクティブラーニングのスタイルで進められ、スト

レスを感じることもなく、非常に良い塩梅でした。

最後は「学んだことを取り入れて5分間プレゼンテーション！」のコーナーです。「2000人の聴衆の前で講演しても緊張しない」という教員がドキドキしている姿は微笑ましくもありましたが、緊張の中でも、みな興味深い内容のプレゼンテーションばかり。さらにBrereton先生が一人ひとりにフィードバックシートを書いてくださったことも、学生の気持ちに戻ったように嬉しかったです。先生、参加者の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。



平成27年度 FDワークショップ 「効果的な講義スライドの作り方 ―伝わるスライドとは―」

開催日時：平成28年2月24日（金）14：00～16：15

会場：白山キャンパス 5104教室 参加者数：25名

講師：浦田 悠氏

（大阪大学教育学習支援センター特任講師）



大阪大学 浦田悠氏

小規模かつ実践的なテーマに絞ったワークショップ形式の研修会を実施するという新たな方針のもと、大阪大学の浦田先生をお招きし、ワークショップを開催した。

前半は、目を引くスライドにしようとしてついつい陥ってしまうスライドの失敗例を紹介いただき、グループワークで「ダメ出し」をすることで、最低限留意すべき点について整理を

し、理解を深めた。後半は、学生にとって見やすくわかりやすい講義スライドを作成するためのデザインの法則、役立つ機能やアプリの活用方法について、講義を受けながら実際にその場で使うことで、参加教員各自が、持参した講義スライドを実際にその場でブラッシュアップした。

参加教員からは、「今まで直感を頼りにしての自己流だったが、分かりやすいPPT作成のテクニックを論理的、体系的に理解することができた」「わかりやすいスライドを作るには内容の重み付けを行い、それを可視化すること、シンプルなおスライドの方がよいことがわかった」「具体的な事例を元にした「ダメ出し」ワークが参考になった」などの声が聞かれ、実効性のある、満足度の高いワークショップとなった。



それぞれの講義スライドのブラッシュアップ

参加者の声

喜岡 恵子（総合情報学部総合情報学科）

パワーポイントのスライドを使って講義することが多いが、スライドについて体系的に学んだことはなかった。本ワークショップの到達目標は、①わかりやすく、見やすいスライドを作るための基本的なルールについて説明できる、②自らの授業や研究発表等のスライドをよりよいデザインに改善することができる、の2点であった。プレゼンの3大要素といわれる「メッセージ」「ビジュアルストーリー」「デリバリー（伝える力）」のうち「ビジュアルストーリー」について解説がなされ、2つのワークを行った。はじめに、提示された2枚のスライドについて問題点や改善できる点を個々に考えた後、グループで各々

の考えをシェアした。続いて、自身のスライドを自身で改善した後、ペアで改善点について意見交換をした。slideument（「スライド」と「ドキュメント」を合わせた造語）ではなく、「伝わるスライド」にするために文章を図に置き換えて表現すること、文章量を減らすことが強調された。個人的には「図・イラストの原則」や「読ませる文章と見せる文章」が特に興味深く、これまで自己流で作成していたスライドを、体系的に見直す良い機会となった。また、他キャンパスの教職員の皆様と交流をはかれたことも収穫であった。ありがとうございました。

平成28年度 新任教員FD研修会

研修部会長 藤澤 誠（食環境科学部健康栄養学科）

開催日時：平成28年7月9日（土）14：45～17：50

会 場：白山キャンパス 5B12教室

参加人数：32名

PROGRAM

1. 開会挨拶
2. 講演「東洋大学におけるFDの取組み」
3. グループディスカッション①
～テーマ「ご着任後3ヶ月を振り返り、東洋大学の学生に思うこと、授業について感じること」
4. パネルディスカッション
～テーマ「東洋大学と『私の授業』はいま」
パネリスト：
藤松 信義（ファシリテーター／理工学部機械工学科）
藤澤 誠（研修部会長／食環境科学部健康栄養学科）
子島 進（国際地域学部国際地域学科）
萩原 喜昭（平成27年度新任教員／文学部英語コミュニケーション学科）
米原 あき（平成27年度新任教員／社会学部社会学科）
5. グループディスカッション②
～テーマ「学生の意欲的・主体的な授業参画を促す授業手法とは？」
6. グループディスカッション内容の発表・質疑応答
7. 総括・閉会挨拶
※研修会終了後、懇親会を開催

平成28年7月9日（土）に平成28年度の新任教員FD研修会が開催されました。この研修会は東洋大学の新任教員を対象とし、本学のFD活動についてご理解をいただくとともに、各教員の持続的な教育改善活動の支援を行うことを目的としたもので、例年、ご着任後3か月ほど経過し、本学の校風に慣れ、実際の授業運営に対する課題等が健在化するこの時期に実施しています。

はじめにFD推進センター長の北脇秀敏副学長から「東洋大学のFD活動」に関するご講演があり、社会情勢を背景とした大学におけるFD活動の必要性について述べられた後、東洋大学のFD関連組織とその活動内容についてのご説明がありました。次に学生FDチーム代表から学生FDチームの活動内容について報告があり、授業紹介冊子の刊行や各種イベントについての説明と、FD活動に関わった経験から得られたものについての発表がなされました。

続いて、参加者は7つのグループに分かれ、グループワークを実施しました。今回の研修会においてはグループワークを2回に分け、初めに課題抽出を行った後、FD委員らによるパネルディスカッションを挟んで、2回目のグループワークにおいて課題に対する解決策を議論していただく形式をとりました。話し合った内容については最後に各グループからご報告いただき、多くのグッドプラクティスやアイデアが共有され、大変有意義なものとなったと感じております。

最後に、お忙しい中ご参加くださいました新任教員の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともFD活動の取り組みにご尽力を賜いますよう、よろしくお願い申し上げます。



グループ発表の様子

新任教員FD研修会に参加して

石塚 智佐（法学部企業法学科）

着任後3か月を経た7月、白山キャンパスで開かれた新任教員FD研修会に参加した。研修会で特に重きが置かれていたのは、教歴年数ごとにグループ分けされた新任教員で行うグループ・ディスカッションである。まず前半は、進行役の先生と新任教員5人で本学学生や授業についての印象を話し合い、本学に着任してからの感想や困っている点などを気軽に話すことができた。本学の学生の特徴や大規模大学ならではの悩み、特に英語の授業の進め方について、普段知る機会の少ない他学部の話の伺うことができ、悩んでいるのは自分だけではないと思い、少し安堵した。



後半はパネル・ディスカッションで他の先生の授業の工夫を拝聴した後に、再度グループ・ディスカッションで学生の意欲的・主体的な授業参画を促すに

はどうするべきかというテーマで改善点などについて話し合い、最後にこれらの内容をグループごとに発表した。限られた時間の中、十分に話し合えなかった論点があったことは残念であり、また、本学のような総合大学では教員の専門科目や学部によってカラーが異なり、抱える問題や前提となる背景が違うため、それらを踏まえて話し合うのはいささか難しく感じることも正直あった。しかし、共有する問題点については、参考になる意見が多く、いくつかの点については早速後期の授業から取り入れようと思っている。



以上、とても有益な研修会であり、このような会を開いて頂いたことに感謝している。

参加者の声

喜田 健司（理工学部電気電子情報工学科）



東洋大学に着任しちょうど3ヶ月。前任校との違いを感じ始めた頃、初めての教員で悩みが始まる頃である。私も前任校の学生との違いや自分が学生だった頃との違いに違和感を覚えていた。このような悩みを持った新任教員が集まり、悩みを共有し、さらに先輩教員からのお話を伺える機会が新任教員FD研修会である。

少人数のグループワークとパネルディスカッションを軸に研修会は進んでいく。5～6名のグループワークでは、少人数だからこそ自分の考え、悩みが発言できる。議論は活発に進み、それぞれの教員の想いが引き出せる。短い時間でその想いを共有し、解決の糸口を探っていった。できれば、数年後同じメンバーでFD研修会という場で集まり、あの時の悩みはどうなったのか、新たな問題が出てきたのかを聞いてみたい。

パネルディスカッションでは、先輩教員からの講義に関する工夫が聞けた。なるほど、面白いと感心させられる内容で講義に取り入れたいと思う内容であったが、個人的には理論系の難しい数式が並ぶ講義ではどのような工夫ができるのかが課題なので、理系科目を担当される先輩教員の工夫を聞いてみたいと思った。

普段関わることの少ない学科の教員と議論できるということも、FD研修会の醍醐味のひとつであろう。学科が変われば先生も学生も授業のスタイルも変わる。様々な話を聞いて参考になったと感じる参加者も多いと思う。研修会后、リラックスした雰囲気での議論の続きや教員との交流ができる親睦会にも参加し、非常に充実した1日だった。



パネルディスカッションの様子

平成27年度 一般教員FD研修会 「学生の主体性を育むための授業運営の工夫」

研修部会長 藤澤 誠（食環境科学部健康栄養学科）

平成28年2月29日(月)に平成27年度のFD研修会を開催しました。平成27年7月に開催された新任教員FD研修会での教員の声を基に「学生の主体性を育む」ことをテーマとしました。2部構成とし、第1部では主体性をテーマとしたグループワークを行いました。第2部では聖心女子大学文学部准教授の杉原真晃先生をお招きし、「学生の主体性を育むための授業運営の工夫」と題したワークショップを行いました。杉原先生には、授業には前提として学生理解が必要となること、次に学生の主体性が発揮されない要因として、知識的要因、技能的要因、情意的要因があり、それぞれの段階で対応方法がことなることについてご説明いただきました。また、情意的要因において学生がやろうとしないのはなぜなのかについて、ARCSモデル（Attention（注意）、Relevance（関連性）、Confidence（自信）、Satisfaction（満足感））を用いてご説明いただきました。その後、小グループに分かれ、実際に問題のある学生の事例を抽出し、その対応策について話し合いました。

本研修会では第1部のグループワークで教員が個々に抱える問題点を明確にし、それを共有した上で、第2部で杉原先生に理論を体系立ててご説明いただいたことで、各教員の抱えている問題点がより明確になりました。今後の授業運営に大いに役立てていただければと存じます。

参加者の声

富安 亮輔（理工学部建築学科）

2015年4月に着任して以来、二度目のFD研修会に2月29日、参加した。テーマは「学生の主体性を育むための授業運営の工夫」である。

まず、約8人ごとにグループをつくり、それぞれの担当授業の状況共有が行われた。その上で、それぞれの解決案が議論された。論点ごとに集約すると「授業運営」「講義用資料作り」「成績評価」「Toyo-Net ACEの活用」「アクティブラーニング」である。その中でも「授業運営」と「講義用資料作り」については活発な意見が交換された。

現況と課題点：課題を出すと、できる学生とできない学生に分かれる。講義を聞いていないのではないかと感じられる状況

である。読み・書き・聞きが同時にできていない。

解決策：少人数では穴埋め式の授業用資料が有効ではないか。大人数講義ではドリル形式の演習問題で対応する。学生間で相互に確認しあう試みも必要でないか。

今回、参加した教員の中では私が年齢も教歴も若く、他の先生方の話は参考にしたいと思えるもので、有意義なFD研修会だった。



平成28年度学部FD活動状況報告会

教育改善対策部会長 千明 誠（経済学部経済学科）

開催日時：平成28年5月28日(土)13:00～15:00

会場：白山キャンパス 2号館16階スカイホール

講演：石井 英真氏（京都大学 教育学研究科）

報告：小川 芳樹（経済学部長）

長島 広太（経営学部長）



京都大学 石井 英真氏



教職員63名が参加

参加者の声

後藤 亘（法学部法律学科）

今回の報告会では、パフォーマンス評価や教員評価、そして、対外評価など、異なる視点から「評価」について考えるきっかけを得ることができた。

石井先生の講演では、パフォーマンス評価の重要性と質的なルーブリックの必要性が述べられた。用語の意味を吟味しながら具体的なパフォーマンス課題と評価方法が紹介され、大変参考になった。私が担当している英語教育では、客観テストに重きを置く傾向があるため、今後、パフォーマンス評価を英語教育にどのように生かすことができるかを考える良い機会になった。また、評価の観点と尺度について、参加者同士がディスカッションする時間も設けられ、とても充実した講演であった。

小川先生の講演では、教員評価と学生との対話の重要性が強調された。特に、教員評価の一部に達成すべき論文数という項目を設けて具体的な数値目標を設定している点は、教員の質保証、引いては、大学のレベルアップに繋がるとも良い取組みであると思った。

長島先生の講演では、学生満足度を高めるための取組みが紹介された。中でも、助教を活用したチーム・ティーチングは体系的な学習支援を進めていく上でとても興味深い方法であった。また、国際化を進めていくためには、授業公開などによる対外的な評価を積極的に取り入れていくことが有効な方法のひとつであるということは、大変勉強になった。

3つの発表を通して、教育と研究の現状とこれからについて深く考えることができ、とても貴重な機会になった。



小川経済学部長



長島経営学部長



5月28日(土)13:00～15:00に白山キャンパス・スカイホール(2号館16階)において平成28年度学部FD活動状況報告会を開催した。今年度の内容は、経済学部と経営学部の学部FD活動状況報告、および、成績評価の手法のひとつであるルーブリックについての外部講師の方による講演である。

北脇秀敏副学長・FD推進センター長による開催挨拶の後、前半は石井英真京都大学教育学研究科准教授より「パフォーマンス評価とルーブリックの基礎と最前線」というタイトルでルーブリックについて実例を含めた包括的な説明をいただいた。ルーブリックとはパフォーマンス課題を通じて単なる知識・技能(知っている・できる)ではなく、その総合的な活用力(わかる・使える)を評価するためのツールである。すなわち、学力・学修の「質」を評価するのであり、今日の社会ニーズと合致する。ルーブリックを活用するためには適切なパフォーマンス課題の設定が必要であり、ルーブリックは実際に利用することで改善されていくものである。質疑応答では多くの質問があり、学部・学科のルーブリック作成を踏まえた具体的な質問もあった。

後半は経済学部の小川芳樹学部長から、経済学部の「教員総合評価」、「ゼミアンケートと学習ポートフォリオ」、「学生との意見交換会」について報告をいただいた。ゼミアンケートの結果(自己の学習成果に対する主観的評価)によれば、評価は学年とともに上昇する。また、データを利用したFD活動が今後重要になるとの指摘がなされた。

次に経営学部の長島広太学部長から、経営学部の「助教を活用したチームティーチング」、「英語科目の授業参観」、「新入生の出席調査」について報告をいただいた。それらの活動は、「教員が2人集まればFD」となるという考え方のもとに、チームティーチングや授業参観等を通じた「現場の共有」が有効な手段となることを示している。

2学部の報告に対する質疑応答の後、教育改善対策部会長の総括によってシンポジウムは終了した。63名の教職員の方に参加していただき、内容に関しても肯定的な意見を多数いただいた。

2学部の報告に対する質疑応答の後、教育改善対策部会長の総括によってシンポジウムは終了した。63名の教職員の方に参加していただき、内容に関しても肯定的な意見を多数いただいた。

平成28年度TA FD研修会

開催日時：平成28年4月16日（土）13：00～15：00（白山・川越・板倉キャンパス）

平成28年4月20日（水）12：30～14：30（朝霞キャンパス）

参加者数：白山12名・川越60名・板倉52名・朝霞4名

本研修会は、本学における継続的な教育改善の取り組みの一環として、新たにTA（ティーチング・アシスタント）として教員の授業補助にあたる学生を対象に、毎年度春学期に実施しています。また、川越・板倉キャンパスでは、TAに加えてSA（スチューデント・アシスタント）も参加対象とし、理系科目特有の役割や業務について、TA/SAの共通理解を深める機会としています。研修会は、各キャンパスのFD推進委員によって実施され、4キャンパス合計128名の参加者のもと、「TA制度の概要説明」と「グループ討論・質疑応答」という二部構成で実施されました。

白山キャンパス

松丸 亮(国際地域学部)

今年度の白山キャンパスでのTA研修会は、2016年4月16日（土）

の午後に開催され、白山キャンパス在籍の大学院生12名が参加しました。研修は、『TA/SAハンドブック』の内容に関する講義と「参加者によるグループワーク」からなり、前半の講義では、TA/SAが教育補助員として授業で主体的に行動できるようになるため、TA/SA制度の概要や、教育補助の目的と役割についての解説がなされました。後半のグループワークでは、3つのグループに分かれ、まず、お互いにハンドブックの理解度の確認を行った後、「授業をとっている学生たちにどのように接するか」について、TAの立場から考える機会を持ってもらい、グループワーク後に発表と意見交換をしてもらいました。意見交換では、TAと学生という距離の近さと守るべき行動規範の難しさについて様々な意見が出され、それを通じて参加者がTA/SAの役割を理解していく様子が確認でき、意義のある研修会であったと考えます。



講演風景



学生GD



学生発表

川越キャンパス

藤松 信義(理工学部)

川越キャンパスでTA/SA研修会が4月16日（土）に実施され、60名（TA38名、SA22名）が参加した。研修目的は、TAとSAが教育補助員として授業で主体的に行動できるようになることである。初めに、TA/SA制度の概要を述べた後、TAとSAに対する期待を述べた。次に、研修会前に配布したTA/SAハンドブックの理解度を確認するワークシートを元に、5名程度でグループディスカッションを行い、円滑な授業運営のためにすべきことや、学生の指導方法、学生との距離感、非協力的な学生への対応などを議論した。いずれも担当教員と十分に話し合いを行い、講義に臨むことが



講演風景



学生GD

大切であるという意見が出され、教員との関係も重要であるとの認識があった。担当教員と教育補助員が連携することが、学生にとってよりよい授業に繋がると考える。また、教育補助員としての取り組みを通じてTA、SA自身の成長に繋がる環境を提供したい。

板倉キャンパス

三浦 健(生命科学部)

板倉キャンパスにおいて、TA/SA研修会を4月16日(土)に開催した。

本年度は52名の参加があり、事前課題に取り組み、目的・役割や業務内容等を理解した上で参加してもらった。当日は、TA/SA制度の概要に



講演風景



ついて説明があり、改めて本学における教育サポートの意義への理解を深めた。その後、TA経験者をリーダーとした10名のグループで、ディスカッションを行った。さらにそこで問題提起された項目を、全参加者で再討議した。その中で、TA/SA業務の多くは実験講義の補助であるため、「教員（TA/SA）とのコミュニケーション」「実験内容の理解」「実験中の安全性の確保」の重要性を共通認識として持つことの大事さが再確認された。また、今年の参加者は、TAよりもSAの数が上回り、「教員とTA」の関係に加え「学生（TA or SA）と学生（SA）」の連携に対する教員のフォローも必要となると感じた。板倉キャンパスの全教員に対しても「TA/SAハンドブック」を配布し、TA/SA制度の概要、ハラスメント防止などを再確認してもらった。



学生GD

朝霞キャンパス

名取 発(ライフデザイン学部)

4月20日（水）、朝霞キャンパス単独開催としては2年目となるTA研修会を行った。参加者は、研修会対象の新規TA全員の3名と、昨年出席できず今年度自主参加した1名の計4名であった。

第1部として「FDとTAの役割について」を「TA/SAハンドブック」を基にレクチャーを行った。第2部として、グループディスカッションを行った。学生4名に対し、学部FD推進委員の教員1名がファシリテーターとして付き、議論を行った。テーマはTAが直面する様々な場面における判断に関するものが中心であった。異なる専攻の学生が集まったので最初は比較的静かであったが、徐々に活発な討議となっていく。最後に議論の結果を発表し、正しい理解ができていたことが確認された。

この研修の成果を生かし、より良い授業運営となるようTA業務を行ってもらいたい。

新企画!

大学院担当教員（海外大学での博士号取得者）へのインタビュー

本取組は研究指導を担当された経験のある先生方へのインタビューを通して、様々な専攻分野がある本学の大学院の中でも共通する研究指導の在り方を見出し、大学全体で共有することを目的としたものです。インタビューは大学院の更なる国際化に資するため、**海外で博士号を取得された教員を対象に行いました。**

- ・インタビュー日時：平成28年6月22日（水）16：30～18：00
- ・インタビュー対象者：坂本 恵三 先生（法務研究科法務専攻）
- ・インタビュアー
小林 正夫（社会学部社会文化システム学科・FD推進委員（大学院部会長））
荻野 剛史（社会学部社会福祉学科・FD推進委員）
FD推進支援室職員 4名
- ・坂本先生のバックグラウンド
大学生（早稲田大学法学部）、大学院生（修士課程：早稲田大学大学院、博士課程：ヴェルツブルク大学）
- ・取得学位
Dr.iur.utr（ヴェルツブルク大学・ドイツ連邦共和国）

Q ドイツの大学院に進学されたきっかけとその理由を教えてください。

私は、学部の時にお世話になった先生の研究生生活に憧れて大学院への進学を希望しました。当時大学院の入試では専門科目の筆記試験のほか、外国語の試験がありました。私は、英語で受験のつもりでいたのですが、指導教授が、「どうせ大学院ではドイツ語の原書購読が中心になるのだから、入試もドイツ語で受けろ」と言われたんです。私の専攻する民事訴訟法は、ドイツ法の影響を強く受けて成立したという経緯もあり、当時の日本の民事訴訟法研究者の多くは、ドイツ法との比較法的研究というスタイルをとっていました。その意味では、ドイツへの留学も必然的だったと思います。学部の第2外国語でドイツ語は履修していましたが、大学院の入試で使えるようなものではなく、それから一生懸命ドイツ語の勉強をして、何とかドイツ語で大学院の入試にも受かることができました。すると指導教授は、「君たちの世代は必ずドイツに留学するのだから、ドイツ語会話を早めに始めろ」と言われました。それで修士課程に入学する春からゲーテ・インスティトゥートに通い会話の勉強を始めました。ゲーテでドイツ語会話の勉強を始めて4年がたった頃、ドイツのゲーテに派遣してくれる奨学金制度に推薦して頂き、2か月間ドイツで会話の勉強をすることができました。そのドイツ滞在中にドイツの大学で指導教授になる先生を訪問し知遇を得る機会にも恵まれました。その後はいろいろな事情があって私は最初オーストリア政府の奨学生としてウィーン大学に留学したのですが、ウィーン大学留学中に、ドイツの指導教授から「研究室の助手のポストが1つ空くが、来ないか？」とお誘いを受け、日本の指導教授からも強く勧められたので、ドイツのヴェルツブルク大学に移ったわけです。

Q ドイツでの生活について教えてください。

助手のポストをもらっていたので、毎月15～16万円の生活費がありました。ドイツの大学は学費は基本的に無料ですので、当時各学期5千円くらいの学生登録料と1万円くらいの健康保険料だけ支払えばよかったんです。住まいは最初学生寮でしたが、その寮が改築工事をする事になり、自分で部屋探しをしました。インターネットなどない時代で新聞の「空き部屋あります」の欄を見て電話で交渉するんですけど、ドイツ人じゃないと分かる電話を切られることもたくさんありました。それ以外に差別的意識を感じたことはあまりないです。一般的に、ドイツ人は日本人に友好的だと思います。

Q 研究指導の先生について教えてください。

実は、私の研究指導教員は、チューリッヒ大学からの招聘を受けて、途中でスイスに移ってしまっただけです。私はヴェルツブルク大学で別の先生に指導して頂くことは考えていませんでしたし、その先生は家族の関係で時々ドイツに帰ってきていたので、その時に集中的に指導を受けたり、その他はその先生がスイスに持っていた別荘で夏休みや冬休みに指導を受けていました。私がチューリッヒ大学に移る可能性もあったのですが、指導教授が、「スイスの学位よりもドイツの学位の方が日本で高く評価されるだろう」と仰ったこともあり、ドイツに留まりました。

Q 大学院の教育システムについて教えてください。

当時ドイツの大学には日本の大学院に相当する組織はなかったのですが、学位論文を書くためには、学部で開講されているいくつかの必修科目を履修することが義務付けられていました。ただ出席は義務ではなく、日本と違って単位制でもありませんでしたので、正直に言うと自分の専門に関わる授業以外にはあまり熱心ではありませんでした。セメスター制がとられており、1学期に7科目くらい履修して7セメスターで修了するのが一番早いコースなので、計50科目くらい履修していたと思います。



法務研究科 坂本先生

Q 論文指導について教えてください。

テーマは学生が選ぶのではなく、研究指導の先生が、私の修士論文のテーマなどを参考にして、まず大枠のテーマを設定します。その大枠のテーマが決まった後、次は章立てをします。章立てがきちんとできれば、論文はほとんど出来上がったようなものです。章立てをする過程で色々な文献を読む作業に入りますが、作業の過程で最初の章立てが「やっぱりこれじゃ駄目だ」と思うところが出てくるので、さらに修正を加えていきます。指導の流れは、ある程度の章立てと、それぞれの細かい項目に何を書いていくかが固まるごとに、内容を見ていただきました。ペースは大体半年ごとですかね。最終的に研究指導の先生の承認を頂くのに4年程かかりましたが、今思えばもっと短くできたなと感じます。

Q 論文審査について教えてください。

博士論文を提出し受理されると、研究指導の先生が主査となり、もう一人副査が選ばれて、主査、副査の二人が博士論文の審査をします。ヴュルツブルク大学では学位を取得するためには、博士論文以外に法制史の史料読解の試験が課せられていました。博士論文が受理された後、ローマ法、教会法、ドイツ法の3分野から一つを選択し、例えばドイツ法を選択すると、その分野の中からくじ引きで課題を選ぶことになっていました。私が引いたくじは、「1850年のプロイセン憲法の基本権4条から9条について」と、それしか書かれていないものでした。大学の講義には、学位取得を目指す学生用に史料読解の講義もありましたが私は出たことがなく、困って相談に行った講師の先生に、同じようなテーマを引き当てた学生が実際に書いた史料読解を見せていただき、それをモデルにして作りました。史料読解については提出期限もあり、現在は6週間が与えられていますが、当時は2週間でかなりハードでした。分量は40ページ程度です。

史料読解の成績がついて合格が出ると、口述試験が行われます。口述試験の内容も、現在は博士論文のテーマに限定されているようですが、当時は、自分の専攻した科目以外に、憲法、民法、刑法、教会法など幅広く基本科目について問われました。まさに博士です。最終的には、博士論文の成績、史料読解の成績、口述試験の成績の総合評価として学位に成績がつくシステムで、学位の評価は、合格が4段階、不合格が1つの5段階評価でした。

Q 先生のいらっしゃった研究室の様子を教えてください。

研究室には、私と同じように博士論文を書いている助手が何人かいました。もっとも論文を書くための特別なゼミがあるわけではなく、基本的には、みんな一人でコツコツやる形です。ただそれぞれのテーマに関連する判例や文献を見つけた時には教え合うということはしていました。あと、一人、私が外国人で学位論文を書いていることをすごく気にかけてくれた学友がいました。彼は、家庭の事情で大学に進学するコースではない学校を修了し裁判所事務官をしていたのですが、機会があつて法学部で苦労しながら勉強し司法試験に合格し学位までとったのです。彼は、「自分と比べれば、坂本は日本で大学を卒業してドイツに来てまで勉強しているんだから、やってできないことはないから頑張れ」とよく励ましてくれました。あれは本当にうれしかったです。



Q 坂本先生が研究指導をされる際のモットーを教えてください。また抱えている課題などがありましたら合わせて教えてください。

学生の指導にあたっては、自分の論文を書くつもりで指導をするということを心がけています。私はドイツの先生にそのように指導して頂きましたので。あと、研究指導を難しいと思うのは、私だけかもしれませんが、日本の研究者は、自分の専門分野が、わりと狭いんです。だから学生がそこから外れたテーマを選ぶと、結構大変かなという感じはします。学生については、待っているのではなく積極的にいろいろ勉強してもらいたいですね。その他、これは自分でも常に意識しなければいけないのですが、論文というのは、何のために書くのかという目的意識を研ぎ澄ませなければいけないと思います。ただ調べたものを活字にするのではなく、なぜそのテーマを論じるのかを明確に示し、自分の考えを展開していくことが重要だと思います。先程お話しした章立てをきちんとする作業は、まさにその作業です。目的意識がばやとしたものは、やはり高い評価を受けたいと思います。

Q 最後に、これから海外の大学院を目指す学生に薦めることはありますか？ また国際化に関するご意見をお聞かせください。

これからドイツの大学院に行く、あるいはドイツで学位を目指すというのであれば、日本である程度論文にめどを付けてから行くことを勧めます。私の留学当時は最短でも5セメスター、2年半が必要でしたが、今は2セメスター、1年だけ学生登録をすれば、学位論文を提出する資格を得られますので、しっかり準備をしていけば、時間を節約できると思います。ドイツ留学についてはいつでも喜んで相談にのります。ドイツの公的な奨学金にDAADがあります。この採用試験も昔は難しかったのですが、最近は志願者が相当少なくなっていると思います。奨学生としての条件は良いので、ぜひチャレンジしてもらいたいですね。外国に出かけることにはリスクもありますが、総合的に見ればプラスの面が圧倒的に大きいので、若い学生の皆さんには、積極的に留学を検討してもらいたいと思います。

国際化ということについては、人によってとらえ方が違うとは思いますが、自分と相手との違いがあることをきちんと認識したうえで、相手の立場をそれでも尊重できるということが、本当の国際化だと思います。その感覚って、日本にいてだけではやはりなかなか身につかないと思います。その意味でもやはり海外には積極的に出るべきなんじゃないかなと思います。

- ・インタビュー日時：平成28年6月23日（木）15：00～16：30
- ・インタビュー対象者：竹井 弘之先生（生命科学部生命科学科）
- ・インタビュアー
児島 伸彦（生命科学部生命科学科・FD推進委員）
藤澤 誠（食環境科学部健康栄養学科・FD推進委員）
FD推進支援室職員 1名
- ・竹井先生のバックグラウンド
中学2年生（父の海外勤務によりロンドンのアメリカンスクールに入学）
高校生（アメリカ・マサチューセッツ州の寄宿学校（設立1778年）に入学）
大学生（コーネル大学）大学院生（コーネル大学大学院博士課程）
その後、日立製作所研究所等の勤務を経て、大学教員へ。
- ・取得学位
Ph.D.（Cornell University・アメリカ合衆国）

Q コーネル大学（アメリカの名門アイビー・リーグ）に進学されたきっかけと卒業されるまでの大まかな流れを教えてください。

私がコーネル大学を選んだ理由は、親しくしてくれていた先輩がそこに行ったのと、それから当時、カール・セーガンという有名な天文学者がその大学の先生だったからです。大学では4年間応用物理学を学び、その後大学院へ進学したので、結局、私は10年半ぐらいそこにいました。学位のタイミングは決まっているわけではなくて、大体準備ができた時に「じゃあ、試験しようか」となります。もう本当にバラバラです。私がいたグループには、優秀な人はそれなりにいて、私の1年上の先輩は2年前にノーベル化学賞を取りました。ただ、途中でやめちゃった人もいたので、別に質は均一ではありませんでした。



インタビューに答える竹井先生

Q 英語圏での生活や英語能力について教えてください。

初めてイギリスに行った時は、英語はほとんどできませんでした。日本の中学で「ジスイズアペン」をやったすぐに行った感じです。やっぱり最初は色々と困りました。まず、学校の雰囲気全然違うんです。イギリスではアメリカンスクールに通っていましたが、まず建物がいまいち中学校らしくなく、部屋が六角形で、言ってみれば幼稚園みたいな雰囲気のところでした。そこで生徒は床に座って勉強したり、壁に張った課題を見ながら宿題をしたりするんです。英語の環境に多少慣れるまでには4～5年かかったと思います。アメリカでは寄宿制の高校に行きましたが、何とか話ができるけど、やっぱり言いたいことを全て言える状態ではなかったです。そこに4年間いて、何とか一応、問題なく色々なことを話せるようになりました。

Q 研究指導の先生について教えてください。

大学に入った時は、物理をやりたいと思っていましたが、3年生の時に初めて生物系の講義を受けたんです。それは生物物理っていう分野で、それに非常に感銘を受けたのですが、その時講義を担当していたのが後の私の指導教授でした。その先生は、英語だとNSOMという名前の顕微鏡を発明した人として、その分野では知られています。私は先生の研究テーマに興味があったので、入学前に事前に相談しました。向こうでは基本的に先生が学費を出すので、事前に承諾を得る必要があるんです。

また、ほぼすべての学生がRAやTAとして働き、学費と生活費を出してもらっていました。ちなみに私は大学院の時はRAでしたが、学部の際はTAをしていたこともあります。1年生向けの授業の補講を担当したこともありました。これは別に制度としてあったわけではないのですが、大学院に入るにあたり、色々アピールできるようなことをしておいた方がいいと思い、やらせていただきました。

Q 大学院の教育システムについて教えてください。

コーネル大学では、学部の時は研究室への配属はありませんでした。大学院に入ってから、最初の1年半は、基本的に実験らしい実験をやりません。QS（Qualifying Examination）というものがあり、最初の1年半ぐらいはその準備のために全ての時間を費やします。それを考えると、今の私のゼミの学生で、4年生でもう学会に行つて賞をもらおうというのは、当時の私からすると信じられないぐらいの早さです。向こうでは、テーマを決めて学会で発表し始めるのは、院に入ってから3、4年目ぐらいにやっと始まります。博士論文のテーマは、先生に任せるというよりは、自分で考えるしかありませんでした。当時はもちろんネットもなく、世界でどんな研究がされているかを確認するために図書館に行って、ひたすら雑誌を読むしかありませんでした。もちろんそれもリアルタイムで情報が出てくるわけではないので、自分が考えているテーマが他の人に先を越される可能性もありました。今このテーマを選んでも、できるかできないかわからないし、できたとしても誰かに先を越されたら、論文が書けなくて卒業できないわけですから、それはやっぱりプレッシャーでした。

だからそれを考えると、今の学生は基本的に「これやってみなさい」って言うってもらえるわけじゃないですか。私は「ちょっと自分たちで考えて、その要素もやってみなさい」という風に言いますが、それでもやはり、至れり尽くせりだなと感じてしまいますよね。

Q 先生のいらっしゃる研究室の様子を教えてください。

私がいたグループは、7～8人ぐらいでした。国籍はアメリカ人半分、外国人は私と中国人です。あまりゼミを丁寧にやってくれるとか、論文の書き方を指導するとかそういうのはありませんでした。ただ一応、学生間のサポートはありました。よくディスカッションとかをやっていたんですが、それは別に時間が決まっているわけではなくて、たまたま何か一緒になって話し始めるんです。そういった意味では、定期的にゼミがあれば良かったなと思います。だけどやっぱり、とにかく自分たちで頑張らないと、どうなるかわからないっていうのが、モチベーションとしては一番強かったです。あとは、他のグループとの講演会などが頻繁にありました。また、3時ごろにコーヒブレイクがあり、そこに行くとかドーナツだとかが全部用意してあって、みんながそこに食べに行くんです。それから外部の演者が来られるのも週に1回ぐらいあったと思います。そのドーナツ代だとかは別に学生が払うわけではありません。ああいうの、やっぱりいいと思うんです。大してお金がかかるものでもないと思うんですけど、良い習慣に繋がるので。

Q 指導教授に受けた指導とご自身の今の研究指導の関連性を教えてください。

指導教授には、ある日「論文書かないの？」って言われて書き始めました。それは一応見ていただき、何回もやりとりして「ちょっとこれ変」っていうことはやりましたが、逆にそれし

かやりませんでした。

私は今、ある意味、指導教授を反面教師としています。ゼミはもちろん毎週やりますし、特に英語に興味を持っている学生には、それは別にやるだとかの工夫はしています。あとは基本的に自分の部屋にこもらなければいけない時以外は実験室の机で仕事をしていて、その際には学生には「いつ邪魔してもいいよ」って言っています。それから強制はしませんが、できるだけあちこちの学会に、国内外問わず学生を色々なところに連れていきます。

唯一できないことは、学生に自分で英語の論文を書く力を身につけさせることです。主に院生に研究の短い進捗報告をA4の3分の1ぐらいで英語で書かかせたりはしますが、英語で論文を書くところまではいっていません。ですので、学生には進捗報告を見せ合って、お互いにアドバイスするというのをやっています。やっぱり、語学を習得するためにはある程度の恥をかくのは仕方ないので、そういう訓練を含めて、文章の書き方を教えています。

あとは、海外で学生がポスター発表などをする時には、30秒ぐらいで説明できるような文章を作って暗記させます。その効果もあって、去年サンノゼに



今回の掲載内容は、90分間全25ページに渡るインタビュー内容を圧縮したものです。紙面の関係上ここでは掲載することができなかった数々の興味深いエピソードが盛り込まれた全編については、平成28年度中にFD推進センターホームページ等に掲載予定ですので、乞うご期待ください！

行った時は、ポスター発表の前に3分間ぐらいの口頭発表があったので、3人にエントリーさせたところ、その1人が2等賞の150ドルを獲得しました。他の若手研究者を含めて全員ですから大したものですよ。それから、別なもう一人は、製薬会社に行きたくて、たくさん面接を受けていたんです。彼はある会社で「これはちょっと駄目かな」と思っていたらしいんですが、面接官に「君、大学院の時にそれなりに英語やったそうですけど、何かちょっと、自己紹介を英語でやってくれない？」と言われ、その学生は、「自己紹介はちょっと。自分の研究紹介を英語でやってもいいですか？」と言って、まさに学会で暗記していたのを実践したところ、向こうの態度がガラッと変わって「君、すごいね」となり、そこに話が決まったそうです。



最後に先生の研究指導のモットーを教えてください。

学生には、色々な経験をしていただくのと、それから実験においても指導はしますが、少なくとも部分的には自分で考えてやってね、やりたいことがあったら、時間を割いてやっていいからってところですかね。「これとこれとこのテーマあるけど、君、どれやりたい？」っていう風に聞いて、その中の詳細は、ある程度は自分で考えてもらいます。全部指導したくはないと思っているので。ある程度、自分で考える楽しさっていうのを経験してもらいたいと思います。やっぱり企業で研究職に就いてもそういう研究ができないので。自分で考えてテーマを選んで、それがどうなるかなということをさらに突き詰めていくと、きっと楽しいはずですから、そういう部分はできるだけ残すようにしています。

学生FDチーム活動報告

齊藤 克弥（社会学部4年）

清水 彩可（法学部2年）

私たちは、FD推進センター直属の学生チームとして「東洋大生がより主体的に学び行動し、東洋大生であることに誇りをもてる大学をめざして」を理念に活動しています。学生FDチームは現在、スタッフの人数不足、学生の「FD活動」への認知が十分でないことなどの問題を抱えていますが、「授業・教育」から東洋大学をより良いものにするため邁進していきますので、今後とも学生FDチームの活動へのご理解とご協力をお願いいたします。

学生FDチームは春学期、「先輩たちによるおもしろ授業紹介冊子WiLL」（以下「WiLL」）の刊行、そして「履修相談会」を開催しました。

WiLLは、履修してみてもその授業や学問に対してさらに興味や関心が高まった「おもしろい」授業について白山キャンパスの学生にアンケートをとり、その結果から8つの授業をピックアップし、先生へのインタビューをベースに掲載した新入生向け冊子です。新入生に多面的・多角的に授業を知ってもらい、学びへの主体性向上を促すことを目的として作成しました。昨年度の春学期から作成をはじめ、今年度ようやく刊行に漕ぎ着けることができました。「WiLL」は「Widen（広くする）、image（想像）、Lead（導く）、Learn（学ぶ）の頭文字をとり、新入生に「自らの意志（WiLL）で授業を選択し広く想像を導いて学んで



先輩たちによる
おもしろ授業紹介冊子WiLL

いってほしい」という意味が込められています。内容はFD推進センターHPにも掲載されておりますので、ぜひご覧ください。

また、4月7日（木）・8日（金）に新入生を対象とした履修相談会を開催しました。本相談会は今年で3回目の開催となり、履修登録期間中の新入生を対象に、学生FDチームスタッフが履修の相談を受け、新入生の不安を解決するとともに、大学と高校での学びの違いなどについて話しました。2日間で計250名以上の新入生が来場し、履修の仕組みや、授業の受け方について等、様々な質問がありました。

秋学期も引き続き、学生の「声」を活かし、教職員の皆様方と連携して活動を展開していきたいと考えています。



履修要覧の見方を説明する様子



250名以上の新入生が来場

他大学との交流 「関東圏FD連絡会」

「関東圏FD連絡会」は、平成21年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、國學院大學（平成28年度新規加入）、東洋大学のFD担当者が集まり、同規模の私立大学が抱えるFD活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しております。

第20回連絡会

日時：平成28年2月23日（火） 15:30～17:00
場所：東洋大学 白山キャンパス8号館 中2階 第2会議室
議題：①各大学からの活動報告
②学生による授業コンサルティング等の実施状況について
③TA向けの教育スキルアップの取り組み状況について

第21回連絡会

日時：平成28年6月30日（木） 15:30～17:00
場所：國學院大學 会議室01（若木タワーB1）
議題：①SD義務化への対応について（各大学の実施方針や取組に関しての意見交換）
②各大学からの活動報告

FD推進センター活動報告（平成28年3月～平成28年8月）

FD推進委員会

◆平成27年度第6回

●日時：平成28年3月22日（火） 15:00～17:00

報告 1 各学会活動状況報告

報告 2 センター長報告

審議 1 ①関東圏FD連絡会（2/23）の開催について
②部会長会議（3/1）の開催について
平成28年度授業評価アンケートの実施について
協議 1 平成28年度ティーチング・アシスタントFD研修会の開催について
協議 2 平成27年度FD推進センターFD推進委員会活動の振り返りと課題抽出

◆平成28年度第1回

●日時：平成28年4月26日（火） 16:30～18:00

報告 1 各学会活動状況報告

報告 2 センター長報告

審議 1 ①履修相談会の開催について（4/7・8）
②部会長会議の開催について（4/21）
報告 3 各委員会からの報告
協議 1 ①英語で行う授業の実施状況及びその課題とFDの観点からの改善策等について
②平成28年度FD推進センターの活動方針について
審議 2 学部FD活動状況報告会の開催について
協議 1 平成28年度FD推進センター活動スケジュールおよび委員会の運営について

◆平成28年度第2回

●日時：平成28年6月2日（木） 18:15～19:45

報告 1 各学会活動状況報告

審議 1 平成28年度新任教員FD研修会の開催について

審議 2 平成28年度英語で授業を行うためのFD研修会の開催について

◆平成28年度第3回

●日時：平成28年8月4日（木） 14:45～16:15

報告 1 各学会活動状況報告

報告 2 センター長報告

審議 1 ①関東圏FD連絡会（6/30）の開催について
②平成28年度Web授業評価アンケートのトライアル実施について
審議 2 平成28年度教育改善シンポジウムの実施について
協議 1 平成29年度以降の授業評価アンケート結果表の簡素化について
協議 2 英語による授業のサポートブースについて

部会長会議

◆平成27年度第1回

●日時：平成28年3月1日（火） 11:00～13:00

議題 1 平成27年度FD推進委員会における活動の振り返りと今後の課題について

◆平成28年度第1回

●日時：平成28年4月21日（木） 18:15～19:45

議題 1 FD推進センターおよびFD推進委員会各学会の活動方針について
議題 2 活動スケジュールについて
議題 3 部会長からの報告

研修部会

◆第1回

●日時：平成28年6月1日（水） 18:45～19:15

議題 1 平成28年度研修部会の活動方針・スケジュールについて
議題 2 TA研修会実施報告
議題 3 英語で授業を行うためのFD研修会の開催概要について

議題 4 新任教員FD研修会の開催概要について

議題 5 テーマ別研修会の開催内容について

大学院部会

◆第1回

●日時：平成28年5月26日（木） 15:00～16:15

議題 1 平成28年度大学院部会の活動方針・スケジュールについて

議題 2 大学院のシラバスの充実について

議題 3 大学院版FDハンドブック（大学院の課題と取組事例集（仮称））の作成について

◆第2回（メール会議）

●日時：平成28年7月20日（水）

議題 1 大学院のシラバスの充実について

教育改善対策部会

◆第1回（メール会議）

●日時：平成28年4月11日（月）

議題 1 平成28年度学部FD活動状況報告会の開催について

議題 2 平成28年度教育改善対策部会 活動スケジュールについて

◆第2回（メール会議）

●日時：平成28年7月21日（木）

議題 1 ルーブリック作成ワークショップ（教育改善シンポジウム）の開催について

授業評価手法検討部会

◆第1回

●日時：平成28年5月24日（火） 18:15～19:45

議題 1 平成27年度授業評価アンケート結果の表示不具合について

議題 2 平成28年度 授業評価手法検討部会の活動方針・スケジュールについて

議題 3 平成27年度秋学期授業評価アンケート結果の学生への情報公開に関する学生アンケート結果の振返りについて（国際地域学部）

議題 4 学籍番号記入式への移行について（国際地域学部）

議題 5 平成28年度秋学期授業評価アンケートWEB実施トライアルについて

議題 6 所見の活用方法の検討について

◆第2回（メール会議）

●日時：平成28年7月13日（水）

議題 1 平成28年度秋学期Web授業評価アンケートトライアル及びアンケート結果の学生への情報公開について

議題 2 平成29年度春学期以降の授業評価アンケート結果表の簡素化提案について

編集部会

◆第1回（メール会議）

●日時：平成28年5月26日（木）

議題 1 「平成28年度FDニュース第18号」におけるページ構成について

平成28年度FD推進センター組織図

